

ルカによる福音書9章1-50節 「神のキリスト」

1A 使徒たちによる神の国の働き 1-17

1B 弟子たちの派遣 1-6

2B ヘロデの当惑 7-9

3B 弟子たちの関わる給食 10-17

2A イエスの使命 18-36

1B キリストの受難 18-27

1C 弟子の告白 18-20

2C 命を捨てる道 21-27

2B キリストの栄光 28-36

3A 悟らない弟子たち 37-50

1B 不信仰 37-43

2B 無理解 44-45

3B 分派心 46-50

本文

ルカによる福音書9章を開いてください。私たちは9章の1節から50節までを見ていきたいと思
います。51節から62節までは、次回の礼拝にてお話していきます。

私たちは前回、イエス様が十二人を弟子として召し出し、それから弟子たちに実地訓練を与えて
おられることを学びました。そしてこれから、弟子たちにご自分の力と権威を授けて、ご自分の働
きを彼らに行かせます。私たちも、弟子となるために三つの段階を踏みます。まず、イエス様につ
いて行くように召されます。自分が願っていることではなく、主がついて来なさいと召しておられる
ことなのです。そして次に、訓練があります。それは座って学ぶことだけでは不十分です。イエス
様と共に過ごすことによって、初めてその場で主がどのような方を知ることができます。ですから、
私たちは主との時間を取ることを、また主に当たって互いに時間を取るということがいかに大切かを知ら
ないといけません。それから、遣わされるのです。

1A 使徒たちによる神の国の働き 1-17

1B 弟子たちの派遣 1-6

1 イエスは十二人を呼び集めて、すべての悪霊を制して病気を癒やす力と権威を、彼らにお授け
になった。2 そして、神の国を宣べ伝え、病人を治すために、こう言って彼らを遣わされた。

イエス様はこれまで、悪霊を制して来られました。そして病気を癒してこられました。これらの力と
権威を弟子たちにお授けになります。そして彼らを遣わされるのですが、その授けられた権威と力

によって行うのであり、彼ら自身の力ではありません。マルコの福音書の最後には、「16:20 弟子たちは出て行って、いたるところで福音を宣べ伝えた。主は彼らとともに働き、みことばを、それに伴うしるしとして、確かなものとされた。」とあります。主が彼らと共に働かれたのです。ですから、「使徒の働き」と、ルカの書いた後の書の名が付けられていますが、使徒を通しての主の働きと言ひ直したほうがよいでしょう。使徒 3 章にて、生まれつき足なえの男に対して、「3:6 金銀は私にはない。しかし、私にあるものをあげよう。ナザレのイエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」と言ったら、彼が立ち上がりました。人々が集まってきたので、ペテロは、「3:12,16 どうして、私たちが自分の力や敬虔さによって彼を歩かせたかのように、私たちを見つめるのですが。…このイエスの名が、その名を信じる信仰のゆえに、あなたがたが今見て知っているこの人を強くしました。」と言っています。ですから、器ではないのです。その人に権威と力を授けている主が大事なのです。

そして、「神の国を宣べ伝え、病人を治すために」と言われています。神の国とは、貧しい者、囚われている人々が、罪の赦しによって解放され、神の支配の下に移される世界です。その中で、病人も治していきます。イエス様が中風の人に対して罪の赦しを宣言し、そしてその病を治されたように、です。

3 「旅には何も持って行かないようにしなさい。杖も袋もパンも金もです。また下着も、それぞれ二枚持つてはいけません。4 どの家に入っても、そこにとどまり、そこから出かけなさい。5 人々があなたがたを受け入れないなら、その町を出て行くときに、彼らに対する証言として、足のちりを払い落とすなさい。」6 十二人は出て行って、村から村へと巡りながら、いたるところで福音を宣べ伝え、癒やしを行った。

ここのイエス様の指導は、普遍的なものではありません。主が十字架に付けられる前に、ご自身がなくなるので、「22:36 財布のある者は財布を持ち、同じように袋も持ちなさい。剣のない者は上着を売って剣を買いなさい。」と言われています。しかし、ここで主が使徒たちに教えようとされている原則は普遍的です。一つに、主が導かれているところは、そこに備えがあるということです。自分で何か用意しなければ出ていくことができない、というものではありません。むしろ、そういった足りないところにこそ、主がその必要を満たされる中で、働きを進めてくださいます。もう一つ、主が戸を開き、また閉じられるということです。聖書の時代、また今もアラブ人の文化ではもてなしがあり、旅人は必ず迎え入れます。彼らが福音に対して心が少しでも開いていれば、泊めてくれるでしょう。そうでなければ、それは福音を拒んでいるに等しいと判断してよいことでした。そう言った時、自分に責任があるわけではありません、本人が拒んでいるのですから、主がその責任を問われず。それが、「足のちりを払い落とす」ということです。

2B ヘロデの当惑 7-9

7 さて、領主ヘロデはこのすべての出来事を聞いて、ひどく当惑していた。ある人たちは、「ヨハネ

が死人の中からよみがえったのだ」と言い、8 別の人たちは、「エリヤが現れたのだ」と言い、さらに別の人たちは、「昔の預言者の一人が生き返ったのだ」と言っていたからである。9 ヘロデは言った。「ヨハネは私が首をはねた。このようなうわさがあるこの人は、いったいだれなのだろうか。」ヘロデはイエスに会ってみたいと思った。

ヘロデがひどく当惑したという話ですが、この十二人が遣わされて主の働きを行っている中で当惑したということですね。イエスご自身の働きだけでなく、主が権威と力を授けた使徒たちの働きも聞いて、それで酷く当惑しています。

その中で、大きな、最も大事な質問が人々の中で出て来ました。それは、「このイエスは誰なのか?」ということです。午前礼拝でもお話したように、人々はイエスを預言者、しかも終わりの日に現れる大預言者という認識はありました。エリヤが来るというのは、主が来られる前にエリヤが来て建て直しをすることを、マラキは預言しています。バプテスマのヨハネの甦りであるというのは、彼はエリヤの霊と力によってきたので、やはり終わりの日を意識しています。そういったことを聞いて、最もヘロデが当惑したのは、ヨハネのよみがえりです。彼こそがヨハネを斬首して、彼が死んだのを知っているからです。「箴言 28:1 悪しき者は、追う者もいないのに逃げる」とあるように、彼は自分のしたことが、自分を苦しめているのです。

しかし、ヘロデはとても不思議な人間です。「イエスに会ってみたい」と思っています。ヨハネに対してもそうでしたが、当惑しながらも彼の言うことを聞いていました。神の真理については非常に興味がありましたが、それと悔い改めるであるとか、自分の生活を変えることとは別にしていたのです。そう言った人で、フェリクスという人がローマ総督にいました。カイサリアで牢獄につながれていたパウロを何度も呼び出して、イエスについて話を聞きました。けれども、パウロは正義と節制と来るべきさばきについて論じたので、フェリクスは恐ろしくなっています(使徒 24:25)。ヘロデのほうは、後でイエス様を殺そうとさえ思いました(13:31)。けれども、イエス様がエルサレムで捕えられて、ピラトのところ連れて行かれ、ピラトがヘロデのところイエス様を送りました。それで願いが叶ったのですが、イエス様はヘロデに一言も答えておられません(23:8-9)。

3B 弟子たちの関わる給食 10-17

10 さて、使徒たちは帰って来て、自分たちがしたことをすべて報告した。それからイエスは彼らを連れて、ベツサイダという町へひそかに退かれた。11 ところが、それを知った群衆がイエスの後について来た。イエスは彼らを喜んで迎え、神の国のことを話し、また、癒やしを必要とする人たちを治された。

ルカは、十二弟子たちを「使徒たち」と言い換えています。使徒とは、「遣わされた者」という意味ですが、そのままですね。そして、イエス様は彼らを連れて退かれています。イエス様はご自身がしばしば、寂しいところに退かれています。神の働きをするということは、父なる神だけの時間が

必要です。主にあつて独りになることも、主にあつて多くの人たちといふことも、どちらも必要です。それを弟子たちにも与えようとされていました。そしてベツサイダは、ガリラヤ湖の北東にある町です。ヨルダン川を渡って東に行きますと、そこはヘロデ・アンティパスの領地ではなく、ヘロデ・ピリピの領地になります。そして北上すれば、ピリポ・カイサリアがあります。ヘロデに、ご自身のことで悪い意味で興味を持ってきたので、主はより安全なところを選ばれたのかもしれませんが。

けれども、群衆がやってきました。ここでイエス様は、「彼らを喜んで迎え」ておられます。これが、イエス様の心です。いつも、チャック・スミスのことをここを読むと思い出します。教会において、問題と課題を持っている人がずっと彼に相談しても、親身になって聞いています。あれだけの大きな教会でも、彼の牧会は変わりませんでした。

12 日が傾き始めたので、十二人はみもとに来て言った。「群衆を解散させてください。そうすれば、彼らは周りの村や里に行き、宿をとり、何か食べることができるでしょう。私たちは、このような寂しいところにいるのですから。」13 すると、イエスは彼らに言われた。「あなたがたが、あの人たちに食べる物をあげなさい。」彼らは言った。「私たちには五つのパンと二匹の魚しかありません。私たちが出かけに行って、この民全員のために食べ物を買うのでしょうか。」14 というのは、男だけでおよそ五千人もいたからである。しかし、イエスは弟子たちに言われた。「人々を、五十人ぐらいずつ組にして座らせなさい。」15 弟子たちはそのとおりにして、全員を座らせた。16 そこでイエスは、五つのパンと二匹の魚を取り、天を見上げ、それらのゆえに神をほめたたえてそれを裂き、群衆に配るように弟子たちにお与えになった。17 人々はみな、食べて満腹した。そして余ったパン切れを集めると、十二かごあった。

ベツサイダの付近にある野原であったので、イエス様は十二人の使徒たちに、もう一つの訓練を与えられました。かつて主は、イスラエルの民にマナを与えられましたが、同じように今、群衆にも与えようとされています。けれども、それを十二使徒を通して行おうとされているのです。「あなたがたが、あの人たちに食べる物をあげなさい。」と言われます。そして五つのパンと二匹の魚だけを差し出します。しか主は、五十人ずつぐらいに群衆を座らせて、成年男子だけで五千人に対して増やしていられました。そして余ったパンが、十二かごです。

この一つ一つの数字が、聖書の他の箇所でも出て来るものです。まず、十二かごですが、これはもちろんイスラエルの十二部族のことであり、また十二使徒のことでもあるでしょう。そして五千人、五つのパン、五十人ずつという、「五」という数字が目立ちます。さらには二匹の魚というように、二という数字も出て来ます。これが、出エジプト記に出て来る数字と重なっているのです。幕屋ですが、その幕を五枚継ぎ合わせて、二つの幕にしてその二つを五十の留め金でつなぎます。また、外庭の掛け幕が東西が五十キュビト、南北が百キュビトです。五が出て来て、五×二は百です。こうやって、神のおられるところで、人々が責任をもって管理している時に五があり、二があるような感じがします。イエス様は、十二使徒に対して、神の国において彼らに任せられた人々を自

分たちで治めていくことを教えておられるのではないかと思います。主は後で弟子たちにこう言われます。「22:30 そうしてあなたがたは、わたしの国でわたしの食卓に着いて食べたり飲んだりし、王座に着いて、イスラエルの十二の部族を治めるのです。」

主は、私たちに対しても教会を治めるように命じられています。「I ペテ 4:10-11 それぞれが賜物を受けているのですから、神の様々な恵みの良い管理者として、その賜物を用いて互いに仕え合いなさい。語るのであれば、神のことばにふさわしく語り、奉仕するのであれば、神が備えてくださる力によって、ふさわしく奉仕しなさい。すべてにおいて、イエス・キリストを通して神があがめられるためです。」主が、私たちの真ん中におられて、ご自分の教会を治められます。

2A イエスの使命 18-36

1B キリストの受難 18-27

1C 弟子の告白 18-20

18 さて、イエスが一人で祈っておられたとき、弟子たちも一緒にいた。イエスは彼らにお尋ねになった。「群衆はわたしのことをだれだと言っていますか。」19 彼らは答えた。「バプテスマのヨハネだと言っています。エリヤだと言う人たち、昔の預言者の一人が生き返ったのだと言う人たちもいます。」20 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」ペテロが答えた。「神のキリストです。」

午前礼拝でお話ししましたように、ここがイエス様の宣教の働きの分岐点です。ここまで、ご自身が誰なのかを知ってもらうために働かれたと言ってよいでしょう。主は祈っておられます、ルカによる福音書の特徴は、イエス様が祈っておられることを書き記していることです。主がこれから弟子たちにご自身のことを明かされることを、祈った上で行われていました。そうであれば、私たちがイエスが神のキリストであると告白する教会を建て上げていく中で、どれだけ祈りが必要でしょうか。そして、ペテロが他の群衆がいろいろ言っている中で、神の選ばれた王、救い主であるキリストであると告白しました。

2C 命を捨てる道 21-27

21 するとイエスは弟子たちを戒め、このことをだれにも話さないように命じられた。

イエス様は、ただでさえユダヤ人たちに祭り上げられて、間違った形で王にさせられようとしていました。そしてヘロデが脅威に感じ始めています。しかし、イエス様が来られた目的は全く別のところにありましたから、決して誰にも話さないようにと強く戒められたのです。

22 そして、人の子は多くの苦しみを受け、長老たち、祭司長たち、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日目によみがえらなければならない、と語られた。23 イエスは皆に言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負って、わたしに従って来な

い。24 自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを救うのです。25 人は、たとえ全世界を手に入れても、自分自身を失い、損じたら、何の益があるでしょうか。26 だれでも、わたしとわたしのことばを恥じるなら、人の子もまた、自分と父と聖なる御使いの栄光を帯びてやって来るとき、その人を恥じます。

イエス様が神のキリストであり、神のキリストだからこそ、苦しみを受けられる神の僕として生きて行かれます。人々を執り成す方、人々の弱さに仕える方、そして最後は、人々の罪のための身代わりになって死なれる方です。それゆえに、神はこの方を引き上げ、全ての名にまさる名をお与えになり、神の右の座に着かれるのです。そして、主は地上に再び戻られ、王の王、主の主として世界を君臨されます。ですから今、私たちはキリストが父なる神に従われたように、この方に従うように召されています。そこで邪魔になるのが「自分」です。自分は自分を生かそうとします。けれども、その自分をキリストのゆえに失います。呑みます。それによって甦られたキリストの命が働きます。この方の命が私たちに満ち、私たちはキリストの十字架につなげられているのです。この生き方を恥じるのであれば、終わりの日にも神の栄光の中でキリストは自分を恥とされます。けれども、キリストのゆえに恥を耐え忍ぶのであれば、神は栄光の姿に招き入れてくださいます。

27 まことに、あなたがたに言います。ここに立っている人たちの中には、神の国を見るまで、決して死を味わわない人たちがいます。」

マタイの福音書ですと、この言葉が章の最後に来ているので、イエス様が意味しておられることについて議論が出てくるのですが、ルカの福音書は区切られていないのですぐに分かります。神の国の栄光を、ペテロとヨハネとヤコブにお見せになるのです。

2B キリストの栄光 28-36

28 これらのことを教えてから八日ほどして、イエスはペテロとヨハネとヤコブを連れて、祈るために山に登られた。29 祈っておられると、その御顔の様子が変わり、その衣は白く光り輝いた。30 そして、見よ、二人の人がイエスと語り合っていた。それはモーセとエリヤで、31 栄光のうちに現れ、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について、話していたのであった。

マタイとマルコは、六日目に山に登ったとありますが、これはルカが、イエス様が教えてから八日ほどと言っているのです。教えている日数も加えているということです。八という数字は大事ですね、七が完全であり、八は新しい始まりです。イスラエルの祭りで、仮庵の祭りがありますが、それを七日間祝います。そして八日目は、聖なる会合を開くように言われています(レビ 23:36)。ゼカリヤ 14 章に、主が戻って来られた神の国で、仮庵の祭りが祝われることが預言されていますが、ルカは敢えて、八日目にある神の国の栄光なのだということを強調したかったのでしょう。

そしてヤイロの家に連れて入ったのと同じ三人の弟子を連れて行っています。ペテロ、ヨハネ、

ヤコブです。人が生き返るといふこと、そしてご自身が栄光の姿に変えられること、またゲッセマネの園で、ご自身が父の御心を選ばれること、この大切なところで三人の証人を必要としていたのでしょう。イスラエルの民がシナイ山のところで主にお会いする時も、アロンとナダブとアビフが途中まで近づいて行きました(出エジプト 24:9)。そこでサファイアを敷いたような御足、そし透き通った青空のような御姿を見ました。同じように、弟子たち三人が神の栄光を見ます。

ちなみに、ここでも、イエス様の祈りが強調されています。それは、これから栄光の姿に変えられることよりも、モーセとエリヤと共にエルサレムにおけるご自分の最期について考えておられたからではないでしょうか。そして、イエス様の御姿が栄光に輝いたのは、この方がまさに神の約束されたキリストであることを示しています。主は僕の姿を取られていましたが、その中身は神の栄光の輝きの本質がありました。ダニエル 10 章にて、ダニエルに現れた姿も栄光に輝いていましたが、黙示録 1 章でヨハネに現れた姿と似ており、その方はイエス様です。

イスラエルにとって、モーセは彼らの歴史の始まりを作った人です。エジプトから脱出し、律法をモーセを通して与えられました。その中で生きてきましたが、最後に主ご自身が戻られる直前にエリヤが現れて、民を建て直す約束されています。この二人の間にイエス様がおられるというのは、モーセもエリヤも主人公ではなく、あくまでもキリストを証する証人にしか過ぎなかったということです。しかも、キリストの苦しみ、エルサレムでの最期を彼らは語っていたのです。つまり、神の国において、キリストがその栄光で輝いているのですが、それはこの方が苦しみを経た後に与えられるものであることをここで表しているのです。神の国は来ます。しかし、この方が私たちの罪の身代わりに犠牲となられて、それで神がこの方をよみがえらせることによって、初めてもたらす栄光です。そして主が戻って来られる時にその栄光と力が見える形で現れます。

ところで、最期というのは、エクソドンというギリシヤ語で英語の Exodus(出エジプト)と同じものが使われています。ご自身が死なれることによって、初めて人々を罪の奴隷状態から解放せしめることができるということです。

32 ペテロと仲間たちは眠くてたまらなかったが、はっきり目が覚めると、イエスの栄光と、イエスと一緒に立っている二人の人が見えた。33 この二人がイエスと別れようとしたとき、ペテロがイエスに言った。「先生。私たちがここにいることはすばらしいことです。幕屋を三つ造りましょう。一つはあなたのために、一つはモーセのために、一つはエリヤのために。」ペテロは自分の言っていることが分かっていなかった。

主の栄光に包まれている時に、彼らは眠くなってしまいました。興味深いことに、預言者ゼカリヤもそのような経験があります。「4:1 私と話していた御使いが戻って来て、私を呼び起こした。私は眠りから覚まされた人のようであった。」主のご臨在があると、自分の肉が反応して、かえってその栄光を見ることがないようにして、眠るようにさせるのでしょうか。いずれにしろ、ペテロは何を言え

ばよいか分からず、幕屋を造りましょうか、と言っています。仮庵の祭りのための幕屋です。

34 ペテロがこう言っているうちに、雲がわき起こって彼らをおおった。彼らが雲の中に入ると、弟子たちは恐ろしくなった。35 すると雲の中から言う声がした。「これはわたしの選んだ子。彼の言うことを聞け。」36 この声がしたとき、そこに見えたのはイエスだけであつた。弟子たちは沈黙を守り、当時は自分たちの見たことをいっさい、だれにも話さなかつた。

雲が湧き起りました。モーセの幕屋においても、神殿においても、栄光の雲がそこを満たしました。さらに、イエス様が地上に戻ってこられる時も雲に乗って来られます。その栄光の雲が満ちたので、弟子たちは神ご自身の聖さが近づいているのを知って、恐ろしくなりました。そして聞こえてきたのは、「これはわたしの選んだ子。彼の言うことを聞け。」であります。この方が言われている事とは？そうです、エルサレムでの最期、この方が裏切られ、死に渡され、三日目に甦ることです。そしてこの方に従うために、自分を捨てて、十字架を背負うことです。けれども、弟子たちの耳は塞がれていました。この方がキリストであると知ってから、彼らはかえって、主の言われることから離れるようになっていきます。神の国の栄光の中には、十字架の苦しみを中心にあつたのにも関わらず、その中心がずっと分からないまま過ぎていきます。互いに思っていることが違っていきます。そしてそれは、ついにイエス様につまずき、見捨てて、三度、知らないままでいうようなところにまで発展します。

そして、三人の弟子はイエス様に命じられていたので、沈黙を保っていました。語つたのはおそらく、イエス様が甦られてからでしょう。ペテロ第二 1 章には、ペテロがこの栄光の目撃者であることを証言し、それで主が再臨される約束も確かなのだと説いています。いや、自分の目撃したものよりも、預言のほうがさらに確かなのだと説いています。

3A 悟らない弟子たち 37-50

1B 不信仰 37-43

そして、山における栄光に輝く出来事から、一気に悪霊との遭遇の現実引き落とされます。

37 次の日、一行が山から下りて来ると、大勢の群衆がイエスを迎えた。38 すると見よ、群衆の中から、一人の人が叫んで言った。「先生、お願いします。息子を見てやってください。私の一人息子です。39 ご覧ください。霊がこの子に取りつくと、突然叫びます。そして、引きつけを起こさせて泡を吹かせ、打ちのめして、なかなか離れようとしません。40 あなたのお弟子たちに、霊を追い出してくださいとお願いしたのですが、できませんでした。」41 イエスは答えられた。「ああ、不信仰な曲がった時代だ。いつまで、わたしはあなたがたと一緒にいて、あなたがたに我慢しなければならないのか。あなたの子をここに連れて来なさい。」42 その子が来る途中でも、悪霊は彼を倒して引きつけを起こさせた。しかし、イエスは汚れた霊を叱り、その子を癒やして父親に渡された。43 人々はみな、神の偉大さに驚嘆した。イエスがなされたすべてのことに人々がみな驚いている

と、イエスは弟子たちにこう言われた。

モーセが主の栄光の中で時間を過ごし後、降りてきたら金の子牛を拝み、乱れていたように、高い山から降りてきたら、彼らは不信仰に満ちていました。イエス様が強い言葉を残されています。「ああ、不信仰な曲がった時代だ。いつまで、わたしはあなたがたと一緒にいて、あなたがたに我慢しなければならないのか。」であります。

彼らの不信仰とは何でしょうか？1-2 節で、イエス様の権威が与えられて、すべての悪霊を追い出して、病気を直し、神の国を宣べ伝える権威を与えられていました。その権威を用いなかったのです。なぜ用いなかったのか？イエス様は、彼らが単にご自身に対する力を信じていなかったことに憤りを抱いておられるのではないと感じます。むしろ、この子が「ひとり息子」であることに深い同情を寄せられているからではないかと思えます。主が憤られる時、これからも小さな子を妨げたりした時でありました。イエスご自身が、神の独り子としてこれから苦しみに遭います。そこで、一人息子だということで、彼に対する憐れみは深かったのではないか？ここで、弟子たちの中で自己中心的な思いが入り込んでいたのではないかと思われます。このように弱くされている者に対する憐れみが少なくなっていて、関心が薄かったのではないか？それで、この子も悪霊が追い出されるのだという情熱と信仰を抱くのに妨げになっていたのではないか？と思えます。

2B 無理解 44-45

44 「あなたがたは、これらのことばを自分の耳に入れておきなさい。人の子は、人々の手に渡されようとしています。」45 しかし、弟子たちには、このことばが理解できなかった。彼らには分からないように、彼らから隠されていたのであった。彼らは、このことばについてイエスに尋ねるのを恐れていた。

イエス様は、ご自身のことを言われています。人の手に渡されると。群衆が、こういった偉大な業に驚嘆している時に、その現象だけを見ている中で、その場その場かぎりの反応しかしていません。しかし、それが群衆と言っても良いでしょう、仕方ありません。しかし主は、共にずっといた弟子たちには知ってほしかったのです。わたしは死に渡されるのですよ、と。先に父なる神が、彼の言うことを聞けと言われていたのに、彼らは聞くことができないでいました。彼らもまた、群衆と同じように今のこと、表面的なところしか見ていない、近視眼的にしか見ていなかったのでしょうか。

3B 分派心 46-50

46 さて、弟子たちの間で、だれが一番偉いかという議論が持ち上がった。47 しかし、イエスは彼らの心にある考えを知り、一人の子どもの手を取って、自分のそばに立たせ、48 彼らに言われた。「だれでも、このような子どもを、わたしの名のゆえに受け入れる人は、わたしを受け入れるのです。また、だれでもわたしを受け入れる人は、わたしを遣わされた方を受け入れるのです。あなたがた皆の中で一番小さい者が、一番偉いのです。」

弟子たちの中に、自己中心的な思いが入ってきたのではないかと思った理由が、この出来事です。おそらく、ペテロ、ヨハネ、ヤコブが山に上って、それで戻ってきたので、彼らの中でねたみが起こったのではないかと思います。そうこうしているうちに、小さき者をないがしろにしていく傾向が彼らの中にできたのではないかと思います。イエス様が十字架につけられることについては、言葉では分かっているにもかかわらずその意味が分からない彼らは、イエス様がエルサレムに行かれてユダヤ人の王となられて、ローマを倒すものだと思っていました。そこで、自分がイエス様の右の座、左の座に着くのだ、という議論をしていたのです。

そこでイエス様は、小さな子をそこに連れてこられたのです。この子を受け入れることこそが、わたしを受け入れる者だと言われています。先ほど、イエス様が弟子たちに激しい言葉をかけられたのは、悪霊につかれたひとり息子をご自身の苦しみとしていたからです。彼がないがしろにされたのは、ご自身がないがしろにされたのと同じように感じておられたからです。だから、このような小さい子を受け入れることによって、神の国の拡がりを見ることができます。ですから、小さき事における大きな力であり、そこで自分を捨てなければいけないのです。

49 さて、ヨハネが言った。「先生。あなたの名によって悪霊を追い出している人を見たので、やめさせようと思いました。その人が私たちについて来なかったからです。」50 しかし、イエスは彼に言われた。「やめさせてはいけません。あなたがたに反対しない人は、あなたがたの味方です。」

ヨハネが、まるで分かっていない発言をしています。受け入れなさいという命令をしているのに、自分の仲間ではない者を排除しています。ヨハネがやめさせていますが、山にいっしょに上って、主のご威光を見た者です。彼の心の中には高ぶりがあったことでしょう。権力を持ちたい、という野望です。自分たちで支配したと言う思いです。

イエス様は、「あなたがたに反対しない人は、あなたがたの味方です。」と言われます。イエス様は分派心を完全に否定されます。しかし、これは私たちのそのままの姿です。イエス様が自分を愛し、選んでくださった。だから、他の人たちは選ばれていないとする気質です。そこで、自分を捨てるという道が必要です。自分に味方しないから、反対していると私たちの肉の思いは自分に語りかけます。けれども、イエス様に拠れば、反対しなかったら味方なのです。これが、自分に死ぬ道です。自分のあり方を捨てて、イエス様の名によって行われている業を、その通りであると認めていくことです。

今回は、イエス様がエルサレムに向って進む話に入ります。ここは、ルカの福音書の中での大きな特徴となります。エルサレムに向かう道で、本当に様々なことが起こっています。しかし、イエス様の思いは、ずっとご自分の最期でありました。そこに向って歩まれる道から、私たち自身も自分を捨て、自分の十字架を背負う道を考えていきたいと思えます。